

【論文】

現代ウズベキスタンの染織工芸

村上 智見

要旨：古代中央アジアのソグディアナ地域は、染織品の一大産地として知られていながら、実物資料の不足からどのような染織品が製作され利用されていたのか不明な点が多い。しかし筆者による出土炭化染織品の調査により、当該地域では様々な種類の染織品を利用していたことが確認できた。これらは現地製と推測されたが、この説を補強するとともに、製作技法や工程、道具などを明らかにするためには、当該地域において伝統的に製作される染織品との比較が必要であると考えた。そこで今日のウズベキスタンで行われている伝統的な製糸・製織技法を調査し、当該地域から出土した考古資料との比較を行った。その結果、今日のウズベキスタンでは、古代から製作されている平織、綴織、フェルトの他、漢～唐代の中国や奈良時代の日本にもみられる緋織や刺繍などが、現在でも同じ技法を用いて製作されていることが分かった。紡織具である紡錘車や緯打具も、ほとんど形を変えずに受け継がれていた。紡錘車で紡がれる糸はZ撚り方向であり、これも遺跡から出土する古代の技法と共通していた。これらは工房ではなく一般家庭でも製作できるレベルのものであり、当該地域の風土や生活に適していることから、今日まで古い技法が受け継がれたものと考えられた。

キーワード：染織、ウズベキスタン、伝統技法

1. はじめに

古代ユーラシアの東西交易で活躍したソグド人の本拠地であるソグディアナ地域¹は、染織品の一大産地として知られていながら、染織資料が残りにくい環境²であることから実物資料が極めて少なく、どのような染織品が製作され利用されてきたのか不明な点が多い。筆者はソグド人の染織文化を明らかにするため、これまで調査対象とされることの少なかった美術的価値を持たない炭化や金属錆着化した出土染織資料の調査を実施してきた。その結果、古代ソグディアナ地域では従来知られていた錦や平織物だけでなく、様々な種類の染織品を利用していたことが分かってきた。中国から導入された絹よりも当地において入手しやすい棉や毛が大半を占めていること、他地域に例のない技法がいくつも含まれていることなどが明らかとなり、素材や製作技法を検討した結果、これらは当該地域独自の現地製染織品と推測された³。

染織品に限らず、古代の技法が今日まで受け継がれている例は少なくないことから、この説をさらに補強するため、当該地域において伝統的に製作される染織品の調査を実施することにした。また、出土染織品の製作技法や工程、紡織具、用途などについても、民俗例を参考にすることでより具体的に復元できるのではないかと考えた。考古資料の多くは劣化が著しく、断片状態で出土することから、製作技法や用途の解明が困難な場合が少なくない。使用される道具や製作工程についても、一次資料には記されていないことから、出土染織品と紡錘車などのわずかな紡織具から推測する他ない。このように考古資料だけでは解明できない製作技法や用途を復元するため、考古学研究ではしばしば民俗例を参考にすることがある。本稿では考古資料との比較のためにウズベキスタンにおいて実施した

伝統染織品調査の成果をまとめ報告したい。

調査地は古代のソグディアナ地域に含まれるウズベキスタン共和国サマルカンド州のサマルカンド市、ジョム地区、パフタチ地区、カシュカダリア州チロクチ地区と、ソグディアナの周辺地域にあたるフェルガナ州マルギラン地区、同国内カラカルパクスタン共和国トウルトクリ地区である（図1）。



図1：調査地

2. 平織物製作

平織物は染織品の中でも最も単純な組織を持っており、人類が最初に製作した織物であったと考えられる⁴。ウズベキスタンにおいては鉄器時代の出土品があり、その後も出土染織品の中で最も多くを占めている。

サマルカンド近郊の一般家庭において、糸紡ぎと織物製作の調査を行う機会を得た。調査地はサマルカンド州パフタチ地区のダブシア村である。ダブシアはサマルカンドとブハラのはほぼ中間に位置し、シルクロードの本道が通るダブシア遺跡に隣接する。村の北側にはザラフシャン川が流れ、放牧と綿花栽培が盛んな土地である。村民は伝統的な土造りの民家で生活を営んでいる。

織物の製作者は、ウズベク人の Toxtaeva Salomat さん（70歳女性）⁵。普段は集団農場で綿花の仕事をする傍ら、空いた時間を利用して趣味で織物を製作している。娘や孫が手伝うこともあるという。

①材料の調達

材料は自宅で飼育している羊から採毛するが、近年羊毛が売れなくなったことから、無駄になるのを惜しんで近所の住民達が無償で提供する羊の毛も使用する。材料の羊毛には「アラビ」（Arabi ; 「アラブの」を意味する）と「カザキ」（Kazaki ; 「カザフの」を意味する）と呼ばれる2種類の毛肉両用種が使用される。羊毛は柔らかくて太く長いものが適しており、使用部位は背中・肩が良質である。採毛時期は5月と9月であり、5月に採毛したものがより良質である。棉は自宅で栽培したものを使用する。羊毛より強く長持ちする

が、汚れが落ちにくい。

②洗毛

羊毛は、洗濯石鹼を用いて1時間半から2時間程かけて手で洗う。乾燥させ、手でほぐしてごみを取り除く。

③製糸

紡錘車で糸を紡ぐ。紡錘車の柄の短い方にある切り込みに糸を挟み、足に棒軸を当て手前に引く(図2)。すると紡錘車が時計回りに回転し、Z撚りの糸ができる。それを棒の長い方に巻き取り、この動作を繰り返す。冬の空いた時間を利用するだけで、ひと冬6kgほどの糸ができる。紡錘車は土器底部を転用したものである。以前は紡輪用に焼いていたという。棒軸部分は硬くて丈夫な桑の木を用いることが多いが、サクランボの木を用いることもある。



図2：糸紡ぎ（パフタチ）

④染毛

羊毛・棉ともに、糸にしてから鍋で煮て染色するが、熱さで糸が収縮しないように、沸騰させず時間にも配慮する。塩を入れると色が長持ちすると言われている。以前は天然染料を用いていたが、現在は化学染料を使用している。

⑤製織

織機に経糸をかけ製織する。製織の際は密に織り、仕上がりが硬くなるように気をつけている。組織が最も単純な平織であることと、単糸1本1本が太いために、大きいものでも5日ほどで完成する。織機は組み立て式の簡易な織機である(図3)。調査した敷物は棉と羊毛を混合した平織であり、白・黄色部分は棉、赤・黒部分は羊毛である。大きさは36×200cm程度であり、羊毛・棉それぞれ1.5kgを使用した。



図3：機織り

文様はウズベキスタンで多く見られる縞模様であり、その時々によって幅や色を変える。図面はなく、技術も文様も特別伝承されないが、母に習って15歳の時から作り始めたという。

一般家庭では綴織物も製作される。綴織物は様々な色糸を経糸に絡めて文様を作り出す多色文織物である。使用する糸は平織物と同じである。平織物製作に必要な綜紬⁶を使用せず、好きな場所に好きな色糸を織り込むことができる。経糸から緯糸がほどけないように、織始めと織終わりの部分は経糸でフリンジ⁷を作る。一方の平織物の経糸は縄目状⁸に処理している。

⑥製品に加工

仕上がった平織物は、縫い合わせることにより、大型の家庭用絨毯、マット、ロバ用荷物袋などになる。棉と羊毛で作った絨毯は、36×200cmの織物をつなぎ合わせたものであり、200×240cm程度である。羊毛・棉それぞれ約6kgを使用している。

3. 綴織物製作

綴織物とは、緯糸に複数の色糸を使い、つづら折りのように糸を折り返しながら織られ

る織物である。色の境目にはハツリ⁹と呼ばれる隙間が生じる。古代エジプトのコプト織りが最古の綴織物と考えられており、ウズベキスタンではタシケント地方の7~8世紀のチャチ遺跡のゾロアスター教寺院から出土している¹⁰。日本では8世紀の正倉院に絹製の綴織物が伝世しており、今日でも京都の西陣などをはじめとして全国で絹の綴織物が伝統的に製作され続けている。今日のウズベキスタンでは一般家庭や工房などにおいて伝統的に製作されており、周辺国はもちろん、トルコなど中近東のキリムも広く知られる。

綴織物の調査は、サマルカンド州ジョム地区において実施した¹¹。

ジョムで開催されるバザールでは、日用品の他、この地域で製作された様々な伝統的な品物が集められる(図4)。販売されるものは絨毯や馬具など曜日によって異なる。朝6時ごろから人々が続々と集まり、絨毯が並び始める。大体ひとり一枚を持ち込み、10時30分の時点で20枚を超える色とりどりの絨毯が地面に並んだ(図5)。近くでは馬やロバ用荷物入れや、毛糸、羊の原毛なども売られていた(図6)。ここで出逢った男性に有名な織手を紹介していただいた。

Qunduz Xudoyorova (68歳女性)さんは、タシケントなどでも展覧会を開くことのあるジョム一有名な織り手であり、彼女の工房と、同じく織り手である孫の自宅において調査を行うことができた。ジョム地域では副業で絨毯を織る人が多く、彼女も小学校に勤務し、12人の子どもを産み育てながら絨毯を織ってきた。



図4：日用品売り場



図5：絨毯売り場



図6：原毛売り場



図7：糸紡ぎ(ジョム)



図8：紡錘車

①材料の調達

ジョム地域の羊毛をバザールなどで使用する。毛刈りは3~4月頃に行う。毛を広げてほぐし、毛用の洗剤を用い40~50度くらいの湯で洗毛、乾燥させる。

②製糸

毛が乾いたら、紡錘車を用いて糸を紡ぐ。紡錘車の棒軸を下に向け、太ももに充てて手前方向に回す(図7)。そうするとZ方向の糸が得られる。紡錘車は木製、石製、土製などさまざまである(図8)。紡いだ糸は毛玉にするが、染織しやすいよう、長い毛束に巻き替える。胡坐をかいて両ひざに毛をひっかけて巻き取る。

③染色

今日では化学染料を用いることが多いが、一部には近くの山から採取した「イスファラク」と呼ばれる、黄色が得られ

る天然染料を用いる。染め上がったら乾燥させ、経糸をくぐりやすくするように小さな糸玉に巻き替える。

④製織

室内に床と水平に設置された木枠（もしくはパイプ枠）¹²に棉の経糸をかける。色糸ごとに織り分けてゆき、ある程度の本数の緯糸を通したら、緯打具によって打ち込む。緯打具は木製の櫛のような形状をしており、中には櫛先に金属を嵌めてより滑らかになるような工夫をしているものもある。緯打具には胡桃などの硬い材質を用いる（図9）。



図9：緯打具

4. フェルト製作

ウズベキスタン共和国内のカラカルパクスタン共和国においてフェルト製作の調査を行った。フェルトとは動物の毛、中央アジアでは羊毛製の不織布の事であり、古くから騎馬遊牧民族を中心に、絨毯やユルタの壁材、馬鞍、帽子などに用いられてきた。中央ユーラシアにおける最も古い例として、パジリク古墳群出土の豪華な壁掛けや、白鳥のぬいぐるみ等が知られる¹³。ウズベキスタンでは、7~8世紀のカフィル・カラ遺跡シタデル¹⁴において、炭化したフェルト状資料が出土している。当該地域においても古代から身近にあった染織品の一つであったと考えられる。日本では法隆寺や正倉院に、単色に染め上げた色氈や、緻密な文様を施した花氈が伝世しており、大陸からの舶載品と考えられている¹⁵。今日のウズベキスタンではフェルトの使用は珍しく、一般家庭ではほとんど見る事ができない。サマルカンド州ジョムにおいては2000年代前までフェルト製作が行われていたが今では廃れてしまった。60年前までは同地域においてユルタ¹⁶に暮らす人がわずかに見られたという。フェルトは主にグルパチャ（長座布団）やチャパン（男性用上着）の中綿、靴の下敷き、絨毯、布団、馬鞍などに使用されていた。

トゥルトクリ地区に住むウズベク人の Seytimbetov egamberdi さん（81歳男性）は、自宅に工房を構えてフェルトを製作している。製作したフェルトはユルタの材料やカーペットとして販売される他、自宅でも使用される。無地のフェルトの他、正倉院の花氈と同じ技法によって色とりどりの文様を施したフェルトが製作されていた。

①材料の調達

自宅で飼育している羊から採毛するが（図10）、足りない分は近くのバザールで購入する。材料にはアラビとカザキが使用される。

②カーディングとごみの除去

刈り取った羊毛は、脂や汚れで塊状となっていることから、繊維を機械でほぐしていくカーディング作業を行う。これによってある程度のごみは取り除かれるが、除ききれなかったごみを一つ一つ手作業で取り除いていく。洗毛は行わない。

③施文

床の上にスダレを敷き、その上に様々な色に染色した羊毛を配置していく（図11）。毛の染色は現在では化学



図10：庭で飼育される羊



図 11 : 文様を配置する



図 12 : ベースをかぶせる



図 13 : 縮絨する



図 14 : 屋外で干す



図 15 : 文様フェルト

染料が用いられている。

④縮絨

文様を敷き詰めたら、ベースとなる羊毛を熊手で運び、同じ厚さなるよう気を付けながら文様の上に敷く (図 12)。敷き終わったら、ほうき様の道具を水に浸し、羊毛全体に行きわたるようふりかける。スタレで巻き、足で蹴って縮絨する。1回20分を3回行う。熱湯をふりかけながら、1時間半くらい腕で縮絨する (図 13)。縮絨が終わったら外に広げて乾かす (図 14)。文様とベースの毛が絡み合い、文様を象嵌したような仕上がりになる (図 15)。

5. 絣織物製作

ウズベキスタンのマルギラン州マルギランでは、工房において絹織物が伝統的に製作されている。特にアトラスという名で知られる絣織物が有名である。サイードアフマド・メドレセにおける調査を実施した¹⁷。



図 16 : 糸枠

絣とは、あらかじめ染め分けた糸を文様の図案に従って配置し、織り上げた織物である。染め分けられた糸は経糸だけに用いられる場合と、緯糸にも用いられる場合がある。日本においては法隆寺と正倉院に7-8世紀の資料が伝世しているとともに、今日でも日本各地で伝統的に製作され、着物の生地として愛好されている。

①製糸

繭を湯で煮て絹糸を取り出す。“Davra”と呼ばれる大きな木枠に絹糸を巻きつけていく (図 16)。Davra は織機にかける決められた本数と長さの糸を計るための道具である。

②染色

絹糸の束の染織しない部分にテープを巻き、染液につけ、染まったら水にさらす（図 17）。染料は茜、クルミの皮、ラック、カシ米尔、玉ねぎ、インディゴなどが使用される。他に Oak (Mo'za) と呼ばれる木の根、アフガニスタンの“Ro'dang”と呼ばれる花などが染料として使用される。塩の結晶を溶かすと自然染料で染色する際に色が良く染まる。



図 17：絣用糸の染織図

③製織

2 枚綜統の織機を使用して製織する。ペダルを踏んで綜統を上げ下げする。緯糸を通す際には、上から垂らされた杼¹⁸に繋がっているひもを引く（図 18）。これにより、木組みの中に入れた杼が左右に行き来する仕組みになっている。実際には綜統は 4 枚あり、持ち上げる糸の間隔を開けるために 2 枚一組にしている。機にかける経糸は長さ 220cm と決まっている。織物の端には染料が十分に染まらない部分があり横縞になるが、これをイスカットと呼んでいる。



図 18：絣織製織

アトラスの種類は使用する素材によって 4 種類に分類できるが、この工房ではその全てを製作している。経緯糸ともに絹であり、伝統的なものを“shoi”という。経緯糸ともに絹糸であり、このうち新しいものを“Atlas”と呼ぶ。shoi と同じであるが、1930～40 年代から金色を使うなどして華やかになったものを指す。経糸が絹で緯糸が棉のものを“Adras”と呼ぶ。裏側はほとんど綿糸しか見えず白い。経緯ともに棉のものを“Buz”と呼ぶ。この工房では、“Bahmal”と呼ばれる、すでに技術が廃れたブハラ・ハン国時代の貴族の衣服に使用されたパイル織物も復元製作している。

6. 刺繍製作

刺繍は今のところ当該地域の古代遺跡からの出土は見られないが、刺繍に近いアップリケ技法が現在のタシケント地方に位置する 7～8 世紀のカンカ遺跡のゾロアスター教寺院跡から出土している¹⁹。

現在のウズベキスタンでは、スザニと呼ばれる刺繍が工房や一般家庭において製作されている（図 19）。スザニ（Suzani）は、縫い針を意味するペルシャ語のスーズン（Suzan）に由来している。嫁入り道具として娘に持たせるために家族や親せきが縫い、一部を空白のまま渡すという風習がある。ウズベキスタンの他タジキスタンでも製作されている。名前は異なるがキルギスやカザフスタンなどの周辺地域でも、刺繍は日常を彩る欠かせない染織品の一つである。



図 19：スザニ製作

今日のウズベキスタンにおいても人気の土産品であり、観光地などでもスザニを縫う女性達を見ることができる。布地は綿と絹

があり、刺繍糸は絹であることが多い。染料は今日でも天然染料が用いられている。文様は地域によって異なるが、魔除けのトウガラシや中央アジアに特徴的な三角形のお守り、豊穡を意味するザクロ、アーモンド、太陽、その他色とりどりの草花が好んで使用される。技法はチェーンステッチとサテンステッチなどがあり、前者は中国・漢代の刺繍にもみられる古い技法である²⁰。



図 20：パイル絨毯製作

7. パイル絨毯製作

ウズベキスタンにおけるパイル絨毯の出土例は、8世紀のカフィル・カラ遺跡からその可能性のある、棉もしくは毛製の炭化資料が1点のみ出土している²¹。中央ユーラシアではアルタイ地方パジリク古墳群から紀元前5世紀頃の世界最古の絨毯が出土していることから²²、伝統的に製作されていたとしても不思議はない。

現在のウズベキスタンにおいてもパイル絨毯は製作されているが、調査することができたのは主にトルコ・ペルシャ絨毯を中心に製作する工場である。当該地域においても伝統的に絨毯製作は行われており、その技術を生かしてより高級感があり人気が高い外国製の絹製パイル絨毯を製作・販売するようになったのだろう。

「サマルカンド・ブハラ シルク絨毯工場」は、ガイドブックにも掲載されるサマルカンドの観光地の一つであり、観光客が高級絨毯を求めにやってくる。ここで製作されているのは絹製のパイル絨毯であり、もともと当該地域で製作されていた伝統的な絨毯ばかりでなく、トルコ絨毯、ペルシャ絨毯が中心となっている。しかし価格はトルコ絨毯・ペルシャ絨毯と比べて安価である。糸は工場敷地内の染織作業スペースにおいて天然染料を用いて染めたものを使用する。織り手は若い女性がほとんどであり、大きさによって一枚1～4人で織り進める(図20)。織機が並ぶ工場に併設して、大量の絨毯が並べられたショールームがあり、売り手は絨毯を広げて次々と観光客に絨毯を見せる。

8. まとめ

ウズベキスタンにおける現代染織品の調査では、今日でも様々な伝統技法が受け継がれていることが分かった。この他にも調査は叶わなかったが、組紐に似た手織りの文様紐や、割き布の装飾品、莫莖状編物に毛糸を巻き付け装飾したもの、染物など、多種多様な染織品が存在している。

一般家庭では紡錘車による原始的な製糸と、簡易な組み立て式の織機による製織が行われていた。箆を使用しない簡易な組み立て式の機は原始機に分類され、中央アジア・西アジアだけでなく、東アジア、東南アジアなどでも使用されている。特に同じテュルク系民族であるカザフ、キルギス、ウイグルなどではほとんど同形態の織機が利用されている他、タジキスタンやアフガニスタン、イランなどペルシア系民族の間でもよく似た織機が使用されている。

古代の出土品に見られる平織物、綴織物、フェルト、パイル絨毯、縄などが今日でも製

作されていることが確認できた他、経糸を縄状に処理する方法や、紡錘車による製糸方法などにも共通点が見られた。紡錘車による製糸では、遺跡から出土する糸の多くがそうであるように、時計回りに回転させて得られる Z 撚糸の伝統が受け継がれていることがわかった。また緯糸を打ち込むための緯打具も、8 世紀からほとんど形を変えずに使用されていることが分かった。

また民俗例調査の重要な成果の一つとして、糸径や撚りの強度、織技などの技法や材質によって、織物の頑丈さや柔らかさ、保温性や吸湿性、見た目の効果等が異なり、用途によって使い分けていることが確認できたことが挙げられる。これは断片状態で出土することの多い出土染織品の用途を知る上で重要な情報である。

以上の調査により、ウズベキスタンで今日も受け継がれている古い技法を確認することができ、出土資料の用途や技法を検証する際に民俗例を参考にすることの重要性を再確認できたように思う。しかし、近年このような伝統技術は失われつつあり、さらに詳細な調査を行い記録することが急務となっている。

本研究は高梨学術奨励基金若手研究の助成を受けて実施した調査の成果である。

注

- 1 ソグディアナとは意味の古代中央アジアにおける文化的地域の呼称。ソグド人の本拠地であり、現在のタジキスタンとウズベキスタンの一部、主にザラフシャン川中流域を指す。
- 2 古代のソグディアナ地域で行われてきた墓葬が、染織品が残りにくい要因の一つとして考えられる。当該地域ではゾロアスター教を信奉しており、鳥葬を行った後に骨をオッサリと呼ばれる土製容器に移して埋葬していた。衣服や副葬品などは伴わない。
- 3 村上（2017）を参照。
- 4 織物では平織物がおそらくもっとも古い技法であるが、布としては織物より早く考案された布製作技術である編布が早い。ウズベキスタンのサマルカンド近郊に位置する鉄器時代のコク・テバ遺跡出土品中に土器編布圧痕が見られることを確認している。
- 5 調査を実施した 2010 年当時の年齢。
- 6 綜紵とは緯糸を通すために経糸を持ち上げる役割を果たす織機の部材のこと。
- 7 フリンジとは結び目のある房の事であり、絨毯の織終わりなどに経糸を処理するために作られることが多い。
- 8 縄目状の経糸処理は、モンゴル高原のノイン・ウラ遺跡（紀元前 1~後 1 世紀）出土の下袴に見られる。
- 9 文様の境界で色糸を折り返すためにハツリと呼ばれる隙間が生じる。
- 10 村上（2012）を参照。
- 11 2019 年 9 月に実施。
- 12 カシュカダリア州チロクチの工房では、縦機により製織されていた。
- 13 加藤（2002）を参照。
- 14 村上ほか（2019）を参照。
- 15 竹ノ内ほか（2015）を参照。
- 16 フェルトを壁材にした組み立て式のテントのこと。中央アジアではユルタと呼ぶが、モンゴルではゲル、中国ではパオと呼ばれる。
- 17 2010 年に調査を実施した。
- 18 杼とは機織りにおいて緯糸を通すための道具のこと。今日では細長い木製の杼に横糸を巻き付け使用している。
- 19 村上（2012）を参照。
- 20 趙（1999）を参照。

- 21 村上（2017）を参照。
22 加藤（2002）を参照。

参考文献

宇野隆夫、ベルディムロドフ・アムリディン編

2013『ダブシア城—中央アジア・シルクロードにおけるソグド都市の調査—』真陽社、京都。

加藤定子

2002『古代中央アジアにおける服飾史の研究—パジリク文化とノイン・ウラ古墳の古代服飾』東京堂出版、東京。

坂本和子

1983「蒙古ノイン・ウラ出土下袴について」『ラーフィダーン』第Ⅲ~Ⅳ巻、国士舘大学イラク古代文化研究所、東京、31-46頁。

坂本和子

2012『織物に見るシルクロードの文化交流—トゥルファン出土染織資料 錦綾を中心に』同時代社
竹ノ内一昭、奥村章、福永重治、向久保健蔵、実森康宏、ジョリー・ジョンソン、本出ますみ

2015「正倉院宝物特別調査 毛材質調査報告」『正倉院紀要』37:1-112.

赵丰

1999 李丝（訳）『織綉珍品』藝紗堂服飾出版。

村上智見

2012「中央アジアのチャチ出土織物類について」『ラーフィダーン』33:15-23.

2013『シルクロードの織物技術交流：ソグディアナおよび周辺地域の織物技術体系の復元研究』奈良大学博士学位論文

2017「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡出土織物の調査（2016年度調査結果）」『日本文化財科学会第34回大会研究発表要旨』日本文化財科学会、148-149頁。

村上智見、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、寺村裕史、宇野隆夫、宇佐美智之

2019「シタデルを覆う火災層の調査—ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査」『第26回西アジア遺跡調査会報告集』日本西アジア考古学会、51-55頁。

（むらかみ・ともみ／北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）